

ジャック ザ ベア

ダン・マッコール
乾 信一郎訳



ジャック・ザ・ベア

ダン・マッコール

乾 信一郎訳



Hayakawa Novels

JACK THE BEAR

by Dan McCall

Copyright © 1974

by Dan McCall

First published 1976 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by direct arrangement with

Joan Daves.

検 印
廃 止

ジャック・ザ・ベア

昭和51年5月15日 初版発行

著 者 ダン・マッコール

訳 者 乾 信 一 郎

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京 (254) 1551 (代)

振替 東京・6-47799

印刷所 日東紙工株式会社

製本所 株式会社 明 光 社

定価 970 円

0097-901510-6942

ジャック・ザ・ベア

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1976 Hayakawa Publishing, Inc.

この本はスチヴンのものである。

ジョン・サイモン・グゲンハイム記念財団の
寛大な後援に対して深く謝意を表するものである。

「子供たちとうまくやっていく秘訣はですね」と父ちゃんはいつもいうのだ、「子供たちが、このぼくを子供の一人だと思つてることですね」たいていのオトナは子供と遊ぶときには、何か特別なことをやつてゐるもんだけど、父ちゃんは大きくなつてゐることを忘れてゐるんだ。それが父ちゃんがテレビの〈子供らしく〉つてショー番組でもつてすぐうけてゐるわけなんだ。今もうけてゐるけど、前ほどじゃないな。はつきりいつてね。そのわけは、こんな別のこともいつてゐるからなんだ、「ぼくのやりたい生活といへば、家庭にいて妻を抱き子供たちと遊ぶことだ」そう、父ちゃんはジョン二世と今だつて遊べる（これおれ、ジャック、ジャックの熊さんのこと）そしてぼくの弟のディラン、三つだ、とも遊べるんだけど、父ちゃんはもうセツタイ二度とその妻、母ちゃんを抱くことはできないんだ、というのは、母ちゃんは去年の冬死んじゃったからだ。そして、父ちゃん母ちゃんは別居してたんだ、離婚じゃないけど、一年近くも別居してた。だから、今はもうニューヨーク州シラキュース市の家と、父ちゃんとディランとぼくのカリフォルニア州オークランドの家とをあっち行ったりこっちへ行ったりしなくてもよくなつてゐるわけ。

母ちゃんと父ちゃんがシラキユースで最初に大げんか始めちゃった時には、ぼく気がとがめてしょうがなかった、ディランだってさ、というのはそのけんかのもとのいくつかはぼくたちのことだったからなんだけど、父ちゃんは説明してくれたよ——両親の間がまずいときには、子供たちは誰でもじぶんのことをとがめるもんなんだって。これはよくある反応だって。まだシラキユースにいるころ、ディランが父ちゃん母ちゃんにくっつかかっているのを見ると、ぼくはそれがぼくたちのせいじゃないってことがわかっていても、弟をよくひどい目にあわせてやった。それに、母ちゃんが死んじゃったのは誰のせいでもない、でなければ母ちゃんのせいかもしれない、朝の三時に氷みたいなおもての道に出ちやうんだもの。だけど、ぼく、どうしてもこわい夢見るのが止まらないんだ。そして、父ちゃんもそうなんだ。ぼくが汗びっしょりかいちゃって目がさめて、階下へミルク飲みなんかに降りて行くと、よく父ちゃんがそれより前に来てるんだ。またはそのあべこべの時もある。そしてぼくたち、ちょっと話をしたり、ただ食堂のテーブルについてすわっていたりする。父ちゃんはブランドーかコーヒーか、それともその両方いっしょに飲む。ぼくたち暗やみがだんだん灰色になって行くのをじっと見ていて、玄関のドアに《クロニクル》紙がボタンと落ちる音を聞いている。

誰だって生きて行かなくちゃならないから、元気出さなくちゃいけない。父ちゃんには仕事がある。シラキユース市ではチャンネル44の仕事だったけど、ここオークランド市ではチャンネル2の仕事だ。父ちゃんはぼくを何度かスタジオにつれて行ったけど、今は前みたいにぼくのことショーに出してくれない。父ちゃんにはじぶんの番組がない、父ちゃんは「スリラー大会の怪獣」なんだ。でも、ラジオの番組は一つ持ってる。そして、こんどのもへ子供らしくって番組だけど、ぼくはその中で「ノースブリッジ・パン」のコミーシャルをやらなくちゃならないけど、これはうちでテープ録音した。

ディランもその中に出たんだけど、一番しまいのところでもってできるだけすぐでかい声で、「もっとパン」というだけなんだ。どうかすると父ちゃんは、録音のあとで、氣を失っちゃうことがある、というのは父ちゃんは仕事のことや、子供たちを育てることや、じぶん自身のことや、それからいろんな全体のことや、すぐく心配で、また母ちゃんのことを悲しいからなんだ。父ちゃんはすぐくさびしいんだ。煙草は飲み過ぎで、酒も飲むんだ。ある晩、父ちゃんは階下の長いすの上にぶっ倒れて泣いてた、夢見て泣いてた、その上悪いことには、ディランがインフルエンザにかかっていて、熱が三十九度五分もあった。これには、ぼくたちびっくりした、全然気がつかなかった、だってぼくたち定期健康診断したばかりだったんだから。看護婦はすっかりたまげてあわてちゃって、「この子は熱が三十九度五分ある」っていった。父ちゃんも全然がたがたになっちゃった、というのは、ぼくたちが知ってたことといえばディランが前の晩に長いすにぐったり伸びちゃって何だかのろろしてて、ふだんの彼と違ってたぐらいのことだった。熱があるかどうかさわってもみなかったし、熱を計ってもみなかった。だって、もう何週間も前に体温計は父ちゃんの手からとび出しちゃってこなごなになってたんだもん。お医者診察室で、父ちゃんは、だめなおやじだなんて思ってることがぼくにはわかってたから、ぼくとしては何もいうことなかった。つまり、「父ちゃん氣にするなよ、父ちゃんはだめな父ちゃんじゃないよ」なんてぼくはいえなかった。それに、ディランは二日ばかりでなおっちゃったんだから。

父ちゃんが最初ここへ来ることを考えたのは、もちろんそれはいやな思い出からのがれるためだった。でも、父ちゃんはいくつかの理由でこの「サンフランシスコ湾地帯」の人間でもあるんだ。そのはっきりした理由の一つはここにコネがあること。母ちゃんと父ちゃんは別居してる時もその前にも、

そのことを話してたっけ。父ちゃんはサンフランシスコにある州立大学の「演劇と報道」科の卒業生なんだ。ぼく、父ちゃんがここで開いたカクテル・パーティーで、その昔の父ちゃんの先生だった人と話をしたことがある。その時、ぼくはカクテルを盆にのせてくばったり、お代りの注文を聞いたり、すごくいい子になってた。なに、ただそんなふりをしていただけのことさ。父ちゃんは汗かいちゃって、大好きな花模様なんかのシャツ着て、オレンジ色のラッパズボンにブーツで、ちょっと目立っちゃった。父ちゃんがみせかけをやっていることがぼくにはわかってたけど、でも時にはみせかけをやらずにちゃんとない時だってあるもんね。特にこのごろは。

ぼくたちが借りてる家はひどいんだ。ということは、いいってこと。父ちゃんはこの家のことを「赤いきば」って呼んでる。そのわけは、背が高くて（三階）細くて、赤い色で、古いからだ。一九二一年にこの家を建てた人は建築家で、やさしい心づかいがされていて、特にその人の奥さんが麻痺患者で歩くことができないんで、この家を建てる時にもそのことを考えに入れていたわけ。たとえば、どの部屋にも全部、玄関のドアみたいにベルがつけてあって、その昔奥さんは車いすに乗ってそのベルを押して合図ができるようになっていた。ぼくたち三人でもって、夜、懐中電灯遊びをやる時なんか、誰かがこのベルを鳴らすか、三人とも鳴らしたりした……たとえば、ぼくが地下室にいて、父ちゃんは懐中電灯持ってさがしまわり、電灯はみんな消して真っ暗なんだ、そしてディランはじぶんの寝室の戸棚ん中にかくれてるってぐあい。ディランはほんとはこの遊びの考えがよくわかってないんで……「ディランはどオオオこにいるんだ？」なんて呼ぶと、きつとやつはいっちゃうんだ、大きな声で、「戸棚ん中にあるよ」なんて。

ぼくたち、昼間、外でも遊んだ。たいてい学校から帰って夕食前の日暮れ時、近所の子供たちとい

っしょに遊ぶんだ。みんなは父ちゃんに少しの間も休ませない。父ちゃんは子供たちと遊ぶとなるといつも気違いみたいで、人によってはへんだっていう人があるかもしれないけど、あのすごく悲しいことのあったあとにはよけいにそうなんだ。まるで気違いみたいにやらなくちゃいけないみたい。それを知ってるのはたぶんぼくだけだろう、というのは、そのあとの父ちゃんを見ると、ほんとに父ちゃんは今から一所けんめいってことがわかるんだ。でも、ほかの子供たちは父ちゃんのことを「スーパ―へんてこ」人間だと思ってるから、ただゲラゲラ笑っちゃって息が止まりそうになっちゃうんだ。毎日いつも午後の四時半ごろになると、子供たちがみんなやって来て、「『カイジユウ』はいつ出て来るんだ？」ってきく。父ちゃんは、時にはテレビのメーキャップしたまま出て来るし、それから父ちゃんの好きな衣装の一つだけど、『英雄シーザー・アスパラガス』のかっこうして、みんなを追いかけてまわすんだ。フェスティンジャーの奥さん、エドワードのお母さんだけど、ぼくらを歩道でつかまえて父ちゃんにいつてたっけ、「あなたには子供たちがなつくふしぎな力があるんだね？」ぼくは父ちゃんがいつもいつてる、わたしは子供の大きいんですよ、というかと思っていたら、この時には、「わたしは完全な怪獣なんですよ」といった。そして、その通りなんだ、父ちゃんは。ロボットみたいにゴトゴト歩いて、「おれは子供が食いたい、子供が食いたい」っていうんだ。そして、父ちゃんの顔は緑・青で、みんなが笑ってそしてこわがるんだ、そして父ちゃんの声はちょうど全世界の地下室の中みたいに、遠くまでひびくんだ、「子供を食うぞ、子供を食うぞ」そして父ちゃんはいう、「おまえは頭がおかしなヤローで、ヘンチキリン小僧だ、親指でつりさげてやるぞ」すると、ちよっぴり知恵遅れでパイみたいな顔つきのエドワードがほんとに棒の先に、ほんのちよっとの間だけ、親指でぶらさがった。すると父ちゃんは急にやめておとなしくなって、そしていうんだ、「ね

えみんな、こういうことでは、みんなオトナにならずにちゃいけないね。ぼくはカイジウなんてひとつも見たことない。怪獣が現われるのは、空に金属光線がある時だけなんだからね」そうすると父ちゃんはほかのただのオトナみたいになっちゃって、たるんで、つまらなそうになったけど、そのうち誰かが、「おい見ろ、あれ何だ？ 空の上、飛行機だ、ヘリコプターだ」といった。すると父ちゃんは、「なに？ ぼくには何にも見えないぞ……」と途中でいうのをやめると、ゆっくりふり向いて、あのラリー・タルボットみたいにゆっくりと、だんだんに「オオカミ男」に変わり始めるんで、ぼくたちみんな四方八方へとんで逃げ出しちゃうと、誰かがディランを押し倒すまいとして、ぼくたち立ち止まると、父ちゃんはディランが痛くしたところにキスしてやって涙をふいてやるんだ。

ほんと困るのは、犬なんだ。ぼくたちの家の裏で、もう一つの通りに向いてるカーマイクルって家なんだけど、ドーベルマンを飼っていて、十頭ぐらいもいるのが、どうかすると気違いみたいに歯をガツガツ鳴らして、うなったりはえたりする。これにはみんながブーブーいってるんだけど、犬の飼育場みたいに商売でやってるんじゃないんだから、どうしようもないんだ。これはあの家の人たちの趣味だもん。ぼくたちとしてはみっともない話なんだけど、ぼくらの裏庭は完全に怪獣が住んでるようなところなんだから。二十ヤードほど坂になっていて、一度も手入れたことなしっていうか、少なくとも何年もの間手入れてないんで、そこら中つたかずらだらけで、おぼけみたいなコケの生えた木だとか、ぼくがトリカブトといってる草だらけなんだ。でも、ごそこそはってなら通りぬけられる。つたかずらがレース編みのトンネルみたいになってるんだから、きっと一九二一年からか、それとも第二次世界大戦からずっと荒れたままじゃないのかな。でも、今は、ぼくたちが「怪獣遊び」やるもんで、裏の犬たちがはいりこむことになった。犬の一つが境の柵に穴をあけちゃったんだが、

関係者一同にとって幸いだったのは、そいつが子犬だったということ……そいつはまだ耳を切りそろえられたばかりの子犬で、副木を当てて包帯をしていて、ちょうどフットボールの横棒のない小型ゴールポストを頭にのせてるみたいだった。ディランはこれまで犬なんかこわがったことなかったんだけど、すっかりびっくりしちやって、化石になったみたいだった。裏の犬たちは誰も裏庭にいない時でも、日の出時なんかにもワンワンはえたてるもんだからみんなびっくりしちやうんだ。だから父ちゃんはいつも『怪獣遊び』をやるのを前庭にしているんだけど、この前庭だつてきちんとなつてやしない。時々ぼくはディランといっしょに裏庭でそつとそつと遊ぶ。それはすぐく大きな木があるからなんだ。高さが五十フィートぐらゐもあるだろうか、ただでもつてこけがくつっている。すぐくりつばな木で、いつかこの家を持っていた人が、木の上に小屋をこしらえたのがあつて、ぼくはそこへ時登つて行つて、父ちゃんの煙草を吸うんだ。（父ちゃんは煙草をかぞえないからね）

ひとつ絶対はつきりしておきたいことがあるんだけど、父ちゃんはそれをふざけてやつたんだなんていつてゐるの。そうじゃないんだ。こうなんだ、『怪獣』が現われてからは物事がいつもうまくおさまらなくなつてゐるんだ。ある日、父ちゃんはお酒うんと飲んで、ほんとべろんべろんみたいになつちやつてた。つまずいてころんじやつて、バラ色のサングラスこわしちやつた、するとエドワードの妹の、これは知恵遅れなんかじゃないケイティが、いったんだ、「おじさんの息、なんかくさいわね、あたし何のにおいだか知つてんだ」父ちゃんはすつかりのろくさになつちやつて、「なんだね？」といった。するとケイティは大声はり上げて、「ウィスキーよ！」といったんで、父ちゃんは顔色青ざめちやつてうちん中へはいつて行つちやつた。ぼくだつてそれがウィスキーでないことを知つてたんだ、ジンのにおいなんだ。その晩のことなんだ、父ちゃんがスパゲティの上にへど吐いちゃつたの。

そしてまたその晩のことだったんだ、ぼくが母ちゃんのことをすごく悪い夢に見ちゃったのも。夢の中でぼくたちはシラキース市の古い家にいて、母ちゃんはよくやってたように、夜中にぼくのベッドの端に腰かけていて、ぼくのおでこのところの髪をうしろへ払いのけてくれながら、こういつてるんだ、「ジャックの熊ちゃん、あんたいつもお母さんのこと愛してしてくれる？　いつもよ？」そして、ぼくはびっくりするような大声で「ハイ」って叫んで目がさめた。母ちゃんはいつもぼくたちがあんまり母ちゃんを愛してないんじゃないかと心配していた。愛してるって信じこませることがどうしてもできないんだ。母ちゃんを見た最後の時、葬式の時をぼくはおぼえていたけど、ぼくの頭の中にはただ一つのことだけしかなかった、それは母ちゃんにぼくたちが愛してるってことを信じこませることだった。そのためにぼくはどんなことでもしたいと思った、そしてあるときの夢の中でとうとうぼくは成功した、そして母ちゃんは「眠り姫」にされていて、ぼくのキスでもって死の魔力から解放することができた。夢の中のことではぼくがすごくびっくりしちゃったことは、ぼくが「二度目の命」の考えを持っているということだった。もし母ちゃんに二度目の命をくれるんだったら、ぼくはよろこんでぼくの命をあげちゃう。これは冗談じゃない、本気なんだ、ぼく。全然文句なしに。

今、ぼくにだんだんわかりかけて来てることは、全世界の人たちみんなが、ほんと大へんな問題を持って来てるってことだ。デクスターのお母さんが、ある日ぼくたちが「怪獣遊び」をやってる時にやって来た。この人はほんとにデクスターのお母さんじゃないってこと、ぼくたち知ってた。この人はデクスターのおばあさんなんだ……ほんとお母さんとお父さんは別れちゃって、お互い別れ別れになって、デクスターとも別れちゃって、この人たちは何から何までみんなばらばらに別れちゃったんだ。ぼくの母ちゃんはひどいけんかはしても、こんなことはしなかった。デクスターのお母さんは、